図書館の設置後まもなく、日野市における読書実態の調査を計画したが、既に奉仕活動にはいっていたわれわれは、調査方法、調査事項についてのみ考慮し、実際の調査は中央大学社会心理研究会に委嘱した。家庭の主婦を対象とし、無作為抽出により、312サンプルを選び、面接方式により調査を行なった。

結果は、われわれの予想した通りだったが、その後の奉仕に参考になった点を次にあげる。

- 本を読まないと答えた人のうち6割の人が、たやすく本が手に入れば読むとしている。
- こうした人々の読みたいと思う本は、実用書が圧倒的に多い。
- これに対し、本を読むと答えた人の読む本は文学書が多い。
- 本を読みたいと思っている人は、全体の9割をこえる。
- 本代としては、教科書代を除き、月に400円から600円が一番多く、全く本代を支出していない人は5％程度しかない。
- これから読みたい本としては、文学書、実用書、歴史書、教養書が上位にランクされている。
- 中学生以下の子供をもつ母親のうち、約3割の人が特に子供に読ませたいと思う本なしとしている。
- ひまわり号の巡回により、半数以上の人が本を読みたい気持が強くなったとしている。
- 最もよく購読されている月刊誌は、「主婦の友」次いで

「婦人倶楽部」「暮しの手帳」「家庭画報」の順（後略）

- 最もよく購読されている週刊誌は、「週刊新潮」、次いで「女性自身」「週刊朝日」「週刊読売」の順（後略）
- 過去一年間を通じ、いいと思った本、「徳川家康」「風と共に去りぬ」「女ざかり」「人間革命」「人間の条件」の順（後略）
- 好きな著者、武者小路実篤、林芙美子、夏目漱石、石川達三、川端康成、谷崎潤一郎、吉川英治、井上靖の順（後略）

c　図書館協力

要求される資料のうちには、現在入手の難かしいものもある。サービスが進めば進むほど、要求資料は複雑多岐にわたり、資料の収集は一層の困難が予想される。こうした時、必要資料を所蔵する他館の協力がえられれば、利用者の要求をみたすことは、さほど困難ではなくなる。

われわれは、こうした場合を予測し、国立国会図書館に対し、資料貸出認可を申請した。このため、日野市民は市立図書館を通じ、国立国会図書館の資料を利用することも可能となっている。

こうした図書館協力は、その後、多数の館との間で進められ前記国会図書館はもちろん、都立八王子図書館、都立青梅図書館、埼玉県立図書館、神奈川県立川崎図書館、中央区立京橋図書館、府中市立図書館等の蔵書が、時々日野市民によって利用されているのである。

われわれの場合、特に郷土史関係の資料で他館の援助を乞うことが多いが、これは新設館に共通の弱点とも言えようか。

d　配本所

配本所の設置にあたり、当初われわれは次のような構想をもった。

- 市内数ヵ所に設置する。
- 町内会館または町会集会所に設置する。
- 500冊程度の図書を常備する。
- 運営は地元有志が行う。
- 少なくとも週に一回は配本所を開く。
- 配本所を設置した地区には、図書館車は巡回しない。
- 書架は図書館が用意し貸出す。

かつて市内14ヵ所を巡回していた都立八王子図書館自動車文庫「むらさき号」の利用経験をもつ幾つかのグループに対し、われわれはこの配本所設置の説明会を何度かもったが、われわれの予想に反し市民の反応はとぼしかった。その理由として次の三つがあげられた。

1. 配本所の管理・運営に自信がもてない。
2. 自動車文庫の積載図書のほうが冊数が多い。
3. 適当な設置場所がない。

こうした空気に対し、われわれはあえて配本所設置を推進することはひかえ、100冊から200冊程度の団体貸出へと方向を転じてしまった。しかし一部の地域では、町会自治会館内に書架を備え、児童図書約200冊による子供図書館の開館にふみき

ったところもある。ここでは中学生を中心とする子供会役員が運営にあたり、発足当初は毎週土曜日午後開館していたが、現在では隔週毎の開館になっている。また一部地域では、自宅を開放してなかば配本所化している例もあるが、これはわれわれの本意ではない。われわれは、あくまでも配本所は公共の場に設置すべきものと考えている。

しかし有志の好意と奉仕に運営をゆだねることは、長期にわたる活動だけにどうも無理があるようだ。

e　問題点

なにごとによらず事業の創設時というものは、関係者の意志努力が見事に結集し、実を結ぶものだが、われわれの場合も、幸運にも自動車文庫の運営は好評裡に進めることができた。しかし配本所の構想は充分理解されないままに終ってしまった感が深い。自動車文庫によるサービスの拡大・拡充に追われているうちに、われわれの方もいつか配本所設置をあきらめてしまったという感じだ。一方「ひまわり号」の利用が、市民の毎日の生活の中で日常化すればするほど、市民の配本所への関心は薄らぎ、むしろ「ひまわり号」駐車場増設の声が高まってきたという一般の傾向も否定しがたい。

このため、配本所に代るものとして、というより「いつでも」資料が利用できる施設としての分館設置を急がねばならない段階へ、早くもわれわれは入ってしまったらしい。

「ひまわり号」については、利用が高まるにつれ、駐車場を次々と増加したが、一台の図書館車での巡回は間もなく限界に

達してしまった。

一日に五ヵ所、週五日（月～金）出動するとして一周期二週間分で50ヵ所の駐車、このレベルを維持するためには絶えず車を点検整備するとともに、乗務員の体調には細心の注意が必要とされた。昼食時の休憩はもちろん、昼食もそこそこに午後の巡回に出る日も決して少なくなかった。

多忙をきわめる貸出業務のかげにかくれがちではあったが、それをささえる資料整理のスピードも限界点近くに達し、資料整備面での立ちおくれは、予約図書の貸出はじめ全般のサービスに少なからぬ影響をおよぼしはじめた。

一方、事務所近辺の子供たちへの、好意的なささやかな貸出が、いつか人手を要するまでに増え、ここでも条例上の措置とともに職員の配置が必要となってきた。

こうした増える利用者、少ない職員、積もる疲労という負の数式を、一挙に正の数式化するものとして、図書館車の増車、職員の増加、資料費の増額という大きな課題が、昭和41年度の奉仕計画に託された。

昭和４１年度奉仕計画

a　自動車文庫の運営

自動車文庫利用の実績は、つとに市当局の認めるところとなり、昭和41年度日野市重点事業の一つとして、市長より市議会へ提出された。「自動車による移動図書館の増強と多摩平に分館機能を設置」するという市の方針のもとに、われわれは二台

目の図書館車発注および分館構想の設定を急いだ。

「ひまわり」二号車購入にあたり、その設計・運営についてわれわれは次の点を考慮した。

- 二号車は一号車より大きくし、内側書架のみとする。
- 書架部分の背面ボディに窓がとれないため、温度調節には十分留意し、送風機二台を後部に取付ける。
- 採光の点で無理があるので、照明を工夫する。
- 車内高を普通女子の身長に合わせる。
- 窓のない点を利用して、両側ボディに「誰でも無料で本が借りられます。日野市立図書館」と書きいれる。
- 一日の巡回箇所は、一号、二号とも四ヵ所以下とする。
- 新設駐車場には、駐車場主任をおかない。
- 二号車は、特に車の往来のはげしい道路上での貸出にあてる。
- 一号車は道幅のせまいところ、人家のいりくんだところ等の巡回にあてる。
- 利用者の多い駐車場では、二台で同時に貸出を行う。

図書館車増車の決定にともない、われわれの職員要求は具体化し、二名の職員増が4月早々認められ職員数は計9名（男4女5）となった。また二号車の運行開始とともに、一日の巡回ヵ所は一台4ヵ所となるので、職員の労力負担は軽減できる見通しがついた。

図書館車の増車にともない、自動車文庫運営の決め手ともいうべき図書費の増額も認められ、増車分の資料整備も職員増と

あわせ、どうやら手配できた。

さて、複数図書館車による自動車文庫運営上の利点の一つとして、利用の特徴をそれぞれ巡回日程編成の上でとりいれ、それに応じた配車プランを練ることが可能となるが、この点を、われわれは原則として次のように利用した。

1. 学校周辺ないし学校内の駐車場への巡回は、終業時間に合わせる。
2. 人通りの多いところは、未登録者も近付き易いよう外開き書架をもつ一号車で巡回する。
3. これまで一つのコースの中で、駐車場によっては乗務員が余る場合があったが、今後は必要乗務員数の員数が同じ駐車場を結んでコースを編成する。

駐車場の増設については、これまで既に申込みのあったところをまず設定し、その後の要望についても追々増設しているがいずれも駐車場主任はおいていない。新規駐車場が、新たに建設された団地内であったりする場合、利用者相互の面識はほとんど限られ、身分の確認等は不可能であり、また主任が貸出のブレーキとなる場合もなくはないので、主任選出を駐車場設置の条件からはずした。

二台の併行巡回が開始されるにおよんで、その積載図書の内容については、ほとんど大差ないよう編成したが、二号車の積載冊数2,000冊に対し一号車1,500冊であることから利用者に不満が生じたりしないよう、リクエスト・サービスは特に強化するべく配慮した。

これまでとくらべ、職員も車もいささか時間的に余裕がでてきたので、積載図書についてはかなり細かな点まで眼が届くようになった。これを積極的に利用し、予約図書のチェックに役立てているが、リクエスト・サービスの能率はこのところ急速に高まってきている。

また蔵書目録を求める利用者は多く、その作製については既に予算措置もすませたが、これを利用者一人一人に配布することは困難なので、新着図書目録「新しい本」を月二回発行配布することにした。これもその成果が直ちにリクエスト・サービスに反映しているようだ。

b　分館運営

図書館事務所での貸出実績、自動車文庫の利用状況からして新たに設置する分館としては、まず児童図書館が選ばれた。

施設建設のための支出は、できるだけ押えたいという図書館方針から、当初施設としては、古バスの利用が予定された。結局都電の廃車を利用し、多摩平団地内に設置することに決まったが、設置場所としては、これまでの団地内での自動車文庫利用の実績からして、ほかに考える余地がなかった。

われわれが考えた分館運営上の原則は次の五点である。

1. 5,000冊程度の図書をおく。
2. 配属職員は1名とする。足りない場合には臨時職員をおく。
3. 図書の選択は分館が独自に行う。
4. 整理は、分館・自動車文庫を問わず一括して行う。

5. 分館は、適当な場所を選んで市内数ヵ所に設置する。

多摩平団地への児童図書館設置と同時に、これまでの事務所を高幡図書館とし条例化したが、後者については成人用図書、一般雑誌、参考図書、児童図書等をおき、将来この地域での図書館サービスの拠点となるよう配慮した。

われわれの図書館の場合、職員各人がそれぞれに仕事の上の自分のパートを受持っているほか、交代で図書館車に乗るなどある業務に専従できる職員は一人もいない。分館の場合も同様で、臨時職員のみ常駐し、あとは職員が順番で分館勤務にあたることにした。ただし、この分館経営を受持つ職員は一名づつきめた。これは第一線の貸出サービスの実情を、それぞれのパートの業務処理の上で生かそうとするもので、その是非については問題もあろうが、現段階では輪番制による利益を大としている。

分館の開館日については、館長の指定によるが、多摩平児童図書館の場合、月曜日から金曜日までの週五日、午後のみの開館とした。日曜日はもちろん、土曜日も休館日となる。5時の閉館時までにはかなりの人の利用が予想され、あえて土曜日開館するには及ばないと判断したからだ。しかし原則論としては年中無休がのぞましいことは言うまでもない。

高幡図書館の場合は、成人の利用もあり、朝8時半から午後5時までの開館としたが、ここでも土曜日午後、日曜日は開館しない。

休日まで開館した場合、職員の労力負担の増加はもちろんで

あるが、他課職員との人事交流上の大きなブレーキとなりかねない。むしろ夜間開館のほうが得策かもしれない。

高幡図書館は7月1日、多摩平児童図書館は8月24日開館したが、多摩平児童図書館の場合、やなせ　たかし氏の記念講演も交え盛大な開館式を催した。席上、古電車の運搬・改装にあたった西武建設株式会社に対し感謝状が贈られたが、その工事は誠意と好意にあふれるものであり、子供たちの夢をさそうに十分な児童図書館が完成した。

また高幡、多摩平両分館のいずれにしても、さほど遠隔地からの利用者については考慮していない。自動車文庫の利用も可能だし、それにわれわれの分館設置計画はこの二館をもって終るものではないからだ。いや、むしろこれは端緒とも言うべきもので、この成果を充分に検討した上で、さらに新分館の設置経営に着手する予定である。

c　問題点

「ひまわり」一号車、二号車の設計上の特徴をそれぞれ使いわけ、これを有効に生かそうとしたわれわれの意図に対し、実際に二台併行して巡回してみると、利用者から予想外の反響があった。二号車の車幅、全長からして巡回可能な駐車場は大体主要道路に連なるが、こうした道路をはさんで生活する利用者の数は多く、二号車の収容能力（20名）をもってしては、到底収容しきれず、どうしてもはみ出し行列と化す人々がでてくる。こうした駐車場での利用者にとって、外開き書架は必要だったのである。しかしこうした道路にこそ事故の危険はより多くひ

そむ。考えあぐねはしたが、当惑してばかりもいられない。一号車にきりかえきれない駐車場にあっては、極力事務能率の向上をはかり、利用者が待たずにすむよう配慮するとともに、予約制度を積極的に案内するなどしている。

しかし結局するところ、一号車駐車場を増やす以外ない、これは今後の駐車場設定の上で影響してくる点が多いものと考えられる。

二台目の図書館車購入決定とともに、職員は増え、一息つけたが、分館開館とともに、また人手不足が目立ってきた。そこで7月、8月、10月とあいつぎ職員増が認められ、職員数は計12名（男7、女5）となった。これで定数いっぱいになったがしかしそれでもやはり足りない。

貸出のみに限ってみても、二つの分館で二名、二台の図書館車で6名の職員が最低必要である。従って計8名の職員は、毎日事務局外で働くことになる。残る職員は館長を含め、4名だが、月平均約1,700冊も入ってくる図書を整理し、一駐車場平均15件の予約図書を準備するのには、どう働いたらよいのか。館長一人しか事務局に残らない日も決して少なくはない。出張なり研修のためには誰かが誰かの仕事を負担するほかない。でなければ、とたんに業務に支障が生じる。新規事業に対する職員増という考え方では、いつになっても絶対数の不足は解決しない。

また現在市内の会社、学校、大学、研究所等の図書館関係者と共に日野市図書館協会を設立し、その会則を定めたところだ

が、協会そのものの評価については今後の活動にまたねばならない。